

世阿弥能楽論の将来文化的文体の特徴

—『花鏡』『音曲口伝』の執筆時期—

重田 みち

世阿弥伝書のうち、義持時代以降(応永十五年以後)に執筆されたもの、またはそのように推測されるものには、漢文や仏書など、大陸からの将来文化的特徴が顕著に表れている。その中で、従来は主に、儒書の引用及び禅と関わり深い個々の語句が指摘されてきた。ここでは個々の語句ではなく、世阿弥能楽論に見える、将来文化的な文体の特徴について言及したい。

最初に、対(つい)表現について述べる。詩の対句に典型的に表れるように、漢語には古来、対的表現を多用する習慣があった。そして、世阿弥能楽論にも、そのような表現が多く見られるのである。

『花伝』のうち、義満時代(義満が没する応永十五年以前)に執筆されたと筆者が推測する部分には、対表現は少ない。「舞・はたらき」(「年来稽古」第一条)「黒白の違ひ」(「物学

第九条)・「位・たけ」(「問答」第六条)・「強き・幽玄」「弱き・荒き」(「花修」第三条)が挙げられる程度である。そして、この程度の対表現が、世阿弥の将来文化の受容に因るものであるとまでは言えない。

しかし、それ以外の世阿弥能楽論には、対表現が数多く見られる。その例を、次に挙げておく。

『花鏡』「題目」の例……「動十分心 動七分身」「体―用」「強身動有足踏 強足踏有身動」「見聞」「先聞後見」「先能其物成 去能其態似」「舞歌」「律呂」

『花鏡』「事書」のうち、『花習』(応永二十五年二月以前に成立)所収と見られる部分の例(右に挙げた例は除く。以下同様)……

「似たる事は似たれ共、是なる事は是ならず」
「温故知新」「浅深」「生死去来」「日々夜々」「行住坐臥」

『音曲口伝』の例……「横主」「祝言・ばうをく」「呂・律」「天地」「鬼神」「得失」「身心」「無文―有文」

『花鏡』「事書」のうち、『花習』以後の執筆と見られる部分、及び「題目」のうち、後年になつて書き加えられたと見られる部分の例……「無心無風」「目智相応」「軽重・清濁は上による」「男鳳声―女鳳声」「無―有」「主―横」「是非」「初心―後心」「目前心後」「左右前後」

『至花道』以後(『花鏡』を除く)の例……
「二曲三体」「無主風―有主風」「非風―是風」「体心捨力―体力砕心」「砕動風―力動風」「声無くて聞き、色無くて見る」「甲乙」「苗而不秀者有、秀而不実者有」「法を得る事は易く、法を守る事は難し」「色即是空―空即是色」「善悪」「不増不減」「意中有景、景中有意」「手舞、足踏」「山雲海月」「陰氣―陽氣」「日夜」「朝暮」「貴賤」「多少」「暖氣―寒氣(暖―寒)」「出―不出」「安―不安」「飛花落葉」「性花―用花」「長短」「大小」「老若」「孔子は鯉魚に別て思火を胸に焚き、白居易は子を先立てて枕間に残る葉を恨む」「望却来、不急却来」他

右には、儒書の引用や仏語も含まれているが、世阿弥の考案によると見られる表現もある。そしてこれらはみな字音語や漢文訓読体

的な表現であり、将来文化の文体を投影したものであることには疑いの余地がない。

そして、このような表現は、『風姿花伝』「奥義」及び『花伝』「別紙」の中で、筆者がこれまでに義持時代に入ってから書き加えられたと推測した部分にも見られる。その例を、次に挙げておく。

「奥義」の例……「都鄙」「上下」「褒貶」「因果」

「別紙」の例……「秘すれば花なり、秘せずは花なるべからず」「因果」「男時―女時」「善悪」「邪正」「去来」「上代・末代」

また、『花伝』「花修」の中で、以前筆者が後年（義持時代）に書き加えられた可能性があると推測した部分の、その推測の根拠となつた語である「体―用」「順―逆」も対表現である。

さらに世阿弥伝書には、対表現をふまえないければ成り立たないはずの、三種並列表現も見られる。その中で、『花伝』にも見られるのは、それ以前から日本でも用いられてきた言葉である「序破急」のみであるのに対し、『花鏡』その他『花伝』以後に書かれたと見られるものには、そのような表現が少なくない。それを次に挙げておく。

「一調・二機・三声」(『花鏡』「事書」・「音曲口伝」)、「初・中・後」(『音曲口伝』)、「老

体―女体―軍体」「皮・肉・骨」(『至花道』)、「種・作・書」(『三道』)、「苗・秀・実」(『遊

楽習道風見』)、「即座・即心・即目」「天・地・人」「上・中・下」(『拾玉得花』)、「治世之音安以樂其政和―乱世之音怨以怒其盛乖―亡国之音哀以思其民困」(『五音曲条々』)このように、ある時期からの世阿弥の能楽

論には、将来文化的文体が顕著に見受けられる。その時期とは何時かが問題なのであるが、世阿弥が禅や儒学の知識を積極的に受容するようになった義持時代、すなわち応永十五年以降と見ておくのが穏当であろう。

そして、右から、「一調二機三声」という言葉が第一条に見える『花鏡』及び『音曲口伝』の執筆開始時期も、応永十五年以後である可能性が高いと言えるのではなからうか。

『花鏡』の執筆開始時期については、その奥書に世阿弥自身が「此花鏡一卷、世、私に、四十有、余より老後に至るまで時々浮かぶ所の藝得、題目六ヶ条・事書十二ヶ条、連続して書と為し、藝跡を残す所也」と書いていることを根拠に、従来、応永十年代に入ってからであろうと推測されてきた。そして、その「応永十年代に入ってから」とは、応永十年前半であるとおおよそ見られてきたように思われる。しかし、右の奥書の「四十有、余より老後に至るまで」は、「時々浮かぶ」に係ると見

るのが自然であつて、「書と為し」たのが「四十有、余」と言うにふさわしい時期からであつたとは限らないものと思われる。したがつて、実際に書にまとめたのは、たとえば義持時代に入つてしばらく時を経た応永二十年代に入つてからである可能性も考えられるのではなからうか。

筆者はこれまで、応永七年にひとまずまとめられた『花伝』初期三篇の執筆直後に「別紙」の第四条までの部分が、また応永十年前後に「奥義」前半部が、そしてその後、おそらくは応永十年代半ば以前に「花修」(ただしそれぞれ後年に書き足されたと思われる部分を除く)が執筆されたと推測してきた。これらの文体・用語と、『花鏡』や『音曲口伝』における先述したごとき文体・用語との差に注目すると、両者の執筆時期の間に、世阿弥が将来文化に慣れる時間を経たと見るのが自然であると思われる。

(立命館大学COE推進機構研究員)